

## 4 . 民俗舞踊の「型」の保存と演技の共同体

### - エイサーの伝承組織と村踊りの伝承組織の比較 -

岡本 純也

#### . はじめに

今年（2008年）の夏、沖縄県恩納村瀬良垣の「村踊り」の調査に赴いた際、民俗舞踊の伝承について考えさせられる、大変興味深い場面に遭遇した。これまで筆者は、沖縄の民俗舞踊「エイサー」の伝承について青年会組織を中心に考察を行ってきたが、戦後になって増殖し、衣装や隊形、踊りの型を変化させてきたこの芸能は、一定の「型」の「保存」や「継承」よりも新奇性を楽しむことを志向するものであり、踊り手である青年達への工夫を期待する観客のまなざしが、シマ（村落共同体）内部の世代間の踊りの多様性やシマごとの踊りの差異の拡大を促したのであると考えてきた<sup>1</sup>。しかし、瀬良垣の村踊りの伝承組織とエイサーを伝承する青年会組織を比較すると、踊りの伝承の場における踊り手を卒業した者の非介入（踊りの指導を行わない）こそが、エイサーの世代間・地域間の差異を創出しているのではないかと考えるようになった。25日間にわたる村踊りの練習が始まる前日（旧暦の七月二十日：「二十日揃い」）、伝承組織である二才団の総会後に激励に訪れたOBと現役団員のやりとりを聞きながら、そのようなことを考えたのである。

本稿では、エイサーの伝承組織である青年会と村踊りの伝承組織である二才団のそれぞれを比較することによって、踊りの「型」の伝承について考察を行う<sup>2</sup>。

#### . エイサーの伝承組織と村踊りの伝承組織

旧盆に踊られるエイサーの伝承組織は、踊り手であるシマ（行政区・字）の青年会であることが一般的である。多くの場合、当該地域出身で高校

卒業から25才程を範囲とする青年男女で組織される<sup>3</sup>。過疎地などで青年が集まらない地域では、高校生を踊り手に加えたり、30代半ばまでを年限としたりし、旧盆の踊り手をどうにか確保する場合もある。エイサーにおける踊りの伝承は旧盆までの1ヶ月間程の練習の中で行われるが、基本的に青年会内の熟練者から未熟練者に対して行われる。青年会を卒業した年配者のエイサーへの関わりは、地方（三線奏者）として参加する程度である。その場合であっても、旧盆の当日に演奏を依頼する場合が大半であり、練習の場では演目を録音したカセットテープなどを利用し、青年だけで練習を行っている。特に60代や70代の年配者がエイサーの練習に参加するということは非常に希である。

一方、村踊りの方は状況が異なる。沖縄の「村踊り」は「村アシビ」、「豊年祭」、「村芝居」、「八月踊り」とも呼ばれ、旧暦の八月十五日前後に、村落内の聖地（御嶽・遊庭）などで様々な舞踊や組踊り、棒術などが奉納される行事である。沖縄本島北部の名護や恩納村の周辺では、二才団や二才中と呼ばれる青壮年による組織が行事、舞台の一切を取り仕切る<sup>4</sup>。これらの組織の資格年齢は青年会のそれよりも長く、瀬良垣の二才団の資格は、「字瀬良垣に本籍又は現住所」のいずれかを有する者で、「義務教育及び高等学校を終了した年度から」男子は満38才まで、女子は25才までとされている。最年長者である満38才の者は二才頭と呼ばれ、二才団の中心になって行事を運営する。

瀬良垣の村踊りの伝承への二才団を卒業した者の関わりはエイサーにおける青年会OBのものとは大きく異なる。「師匠」や「長老」と呼ばれる60代、70代のかつての踊り手が指導の場に関わ

るのである。村踊りの演目は、毎年踊られる主要な演目と過去に演じられ年ごとにプログラムに入れられるものとに分けられるが、年齢ごとに踊る演目がおおよそ決まっており、演者は同じ踊りを3年ほど続けて踊り、年を経るにしたがって演目を変えていく<sup>5</sup>。新しい踊りを踊る際には前の踊り手、すなわち、踊り手よりも目上の団員が責任をもって指導をする。団員の中の指導者は「元師匠」と呼ばれ、旧の七月二十一日の練習開始から2週間ほどは「元師匠」による指導が中心となる。すなわち、この期間は二才団のみで練習し、長老による指導はそれ以降に始まるのである。長老たちは本番までの10日間、毎晩の練習で厳しい指導にあたる。

#### ・エイサーの伝承と村踊りの伝承の相違

上記のように、エイサーの伝承と村踊りの伝承を比較すると、伝承組織を卒業した者の伝承の場への関わり方に大きな違いがあることが理解できる。前者にはOB・OGの練習の場への関与が正式に認められていないが、後者にはそれが正式に位置付けられているのである。このことによって踊りの「型」の伝承にはどのような違いがあるのであろうか。

踊りの「型」の継承は、それを身につけた者からそれを身につけていない者に対する指導の中で行われる。青年会の組織の中だけで「型」の継承が行われるエイサーの場合、最年長者であっても自らの踊りの経験は長くて10年程度である。また、踊りを指導する際には、自らは十分に理想とする「型」が身につけられていないが、自分が指導を受けた目上の世代の「よい」と認められた「型」を指導しようとするところがあるが、青年会のエイサーの場合、最年長者であっても、その理想とする「型」を求めることができるのは自分より10年上の世代までが限界である。他方、60代、70代の年長者が指導にあたる村踊りでは、「型」の継承に関わる時間的な範囲は長くなる。長老である師匠が若い頃に目上の者から指導を受けた「型」

を伝えようとする場合、30～50年以上がその範囲となるであろう。現在の10代、20代に指導されている「型」が40年前の「型」とまるで同じであることさえ、村踊りの伝承では一般的なのである。

エイサーの調査を行っているとき、60代、70代のインフォーマントから、「今のエイサーは昔の型が崩れている」という嘆きが頻りに聞かれる。彼らが口にする「型」と現在の青年会が理想とする「型」にはズレが生じていると考えられる。すなわち、数十年前の踊り手と現在の踊り手とでは、見えている「型」が違うのである。そして、エイサーの場合、このズレを自覚化して修正する場が存在しないのである。また、若者の新奇性への志向は、結果として過去に踊られていた「型」を崩すことにつながるかも知れない。しかし、そのようなことがあっても、それを矯正するような場が、エイサーの伝承の場には存在しないのである。そのことが、世代間によるエイサーの差異を大きくすることの原因であると考えられるのである。

#### ・まとめにかえて

伝承される土地に生まれ育った者なら誰もが踊り手になることができるエイサーや村踊りは、踊り手と、かつて踊り手であった者、そしてこれから踊り手になっていく者から構成される「演技の共同体<sup>6</sup>」をつくりあげている。青年会や二才団を卒業した者は厳しい批評眼をもった観客として、この「共同体」を支えるが、現役の踊り手の演技に対する年長者の介入の度合いがエイサーと村踊りでは異なるのである。前者の場合、観客は踊りを観て批評をすることはできるが、実際に指導をする機会は与えられない。後者の場合には「口」も出すし、「手」も出すのである。こうして、村踊りの「型」はエイサーの「型」に比べて、長期的に「ゆらぎ」が生じにくくなっているのである。

それでは、50年、いや、もしかすると100年を超えるかも知れぬ「型」が毎年再現される村踊りを、当事者達はどのように楽しんでいるのであ

ろうか。当然のことながら、長期的に「ゆらぎ」の少ない「型」はシマの者達に共有されている。したがって、熟練の観客にとって演技の「うまい」「下手」だけでなく、その者の踊りの特徴までもが「型」を通して把握できるのである。子どもが成長し踊り手になった時に、親の踊りと比べて「うまい」「下手」、特徴が「似ている」「似ていない」などが楽しげに語られることがある。このようなことが可能なのも「型」があってのことなのである。また、理想とされる「型」に対して、踊り手がどの程度それを演じられているかによって、その者の成長が見て取れるのも毎年観ているシマの観客の楽しみであるという<sup>7</sup>。

今年の二十日揃いの後の語らいの中で、数年前に二才頭を勤め上げたOBが今年の頭達に語っていた次のような言葉が印象に残っている。

「村踊りの楽しみには、観る楽しみ、踊る楽しみ、文句を言う楽しみがある。自分の踊りに文句を言う年配の方がいても口答えしてはいけない。楽しませてあげているんだと思いなさい。二才団の活動に協力してくれない同級生がいても怒ってはいけない。放っておきなさい。彼らは、村踊りについて仲間と語り合うという一生の楽しみを失うことになるのだから。」

見事に当事者の村踊りの「楽しみ」「歓び」を言い表した言葉であろう。また、二才頭になった者が、上の世代からの注文や活動に非協力的な団員の存在に苦労していることをも言い表しているともいえよう。本稿では十分な記述ができなかったが、今後は、このような当事者の言葉に耳を傾け、民俗舞踊の伝承について分析していきたいと考えている。

<sup>1</sup> エイサーの多様性を生み出す原因について、戦後に沖縄で行われたエイサーコンクールやエイサー祭りというイベントの中で「ショー化」が進んだということに触れつつ、筆者はかつて以下のように記している。

「……旧盆に祖先の霊を供養するということもシマのエイサーの重要な側面であるが、若者がその時代の流行歌を取り入れたり、替え歌を作ったりしてシマの人々を楽しませるといふ面もエイサーが従来から持っていた大切な側面である。この側面を忘れてしまったらエイサーは踊り継がれてこなかったであろう。そして、この伝統をうまく発展させる形で大きなイベントに成長してきたのが全島エイサーコンクールであり、全島エイサーまつりなのである。エイサーのショー化を導く『これまでにどこの誰もがやったことのない工夫によって観客を楽しませる』という精神はいわばエイサーの生命力の核なのである。」

岡本純也「戦後沖縄社会におけるエイサーの展開～ウチナーンチュにとって「エイサーコンクール」とはなんであったのか～」沖縄全島エイサーまつり実行委員会編『エイサー360度～歴史と現在～』那覇出版社、1998年、67-68ページ参照

<sup>2</sup> 八月十五日に行われる村踊りは沖縄の各地にみられる伝統行事である。各地域において、その形態や伝承組織などは多様である。ここで取り上げる瀬良垣の村踊りは二才団による行事運営、踊りの伝承が特徴であるが、これは村踊りの中でも希な事例と言える。しかし、ここでは、踊りの伝承の場における青年と年長者の関係性をとらえるために、瀬良垣の村踊りを選択した。本稿で「村踊り」といった場合、「瀬良垣の村踊り」を想定していることを注記しておく。

<sup>3</sup> 最近では自分の出身地以外の青年会に参加する若者も増えているが、基本的には自分の出身地の青年会に参加することが一般的である。

<sup>44</sup> 知念由里子は、瀬良垣と同様に二才団によって行事運営、踊りの伝承が行われている恩納村恩納の村踊りの事例を報告している。また、板谷徹は戦前に「子弟方<sup>していーかた</sup>」という16才～40才までの青壮年組織によって担われていた名護市大兼久の村踊りの事例について報告している。

知念由里子「村踊りの民俗誌～恩納村恩納～」『ムーサ』第2号、2001年

板谷徹「村踊りの民俗誌～名護市大兼久～」『ムーサ』第2号、2001年

<sup>5</sup> 板谷徹『瀬良垣の豊年祭』瀬良垣公民館、2002年、18ページ参照

---

<sup>6</sup> 橋本裕之は「演技の共同体」を「何よりもまず当事者に貢献する多種多様な資源を効果的に付置した場」として規定し、「演技を習得する／させる」過程を記述する「演技の民俗誌」を試みている。橋本裕之「演技の民俗誌 松戸市大橋の三匹獅子舞」『松戸市立博物館調査報告書 1 千葉県松戸市の三匹獅子舞』1994 年

<sup>7</sup> 瀬良垣の「村踊りの民俗誌」の著者である板谷徹は、詳細な村踊りの記述の最後に以下のように当事者達の楽しみ方について述べている。

「瀬良垣では二才団を卒業した満 39 才を若年寄りと呼び、さらに 40 才以上がウスメー（「長者の大主」では百二十歳の大主をウスメーとする）とされるように、二才団を終えた男性は長老であり隠居であるとの感覚があった。平均寿命の上がった現在は 65 歳にならないと老人会に入れないから現実とのずれはあるが、高校卒業から 38 歳までの年齢層はシマの働き手であり、シマの中核ともいうべき存在であることに変わりない。シマで生まれた男はすべて二才団に加入してそのほとんどが舞台を経験し、二才団を卒業したウスメーは観客となる。自身も舞台を経験したウスメーたちが毎年ほとんど変わらぬ演目の豊年祭に見飽きぬのは、舞台の上にシマのなかで二才の成長と働きを見ているからではなかろうか。」

板谷，前掲書，38 ページ参照